

の奮いた序文等に據れば、その事がないやうである。千代は壯年の頃京に遊び、又伊勢に往きて麥林舎乙由に會したこともあり、加賀に來杖した俳人は皆千代の家を訪うた爲、名聲大に顯れるに至つた。寶曆四年の暮五十二歳で剃髮して素庵と號し、十三年千代尼句集乾坤二冊が無外庵既白によりて刊行せられ、明和八年その後篇がはいかい松の聲と題せられ、同じく既白の出版する所となつた。この年以後千代は老衰して病床に横たはつたが、安永四年九月八日に『月も見て我はこの世をかしく哉』の吟を辭世として歿した。享年七十三。養子白鳥後を繼いだ。千代の葬所は詳かでないが、二十五回忌辰に松任聖興寺門内に句碑が建てられ、三十七回忌にも金澤念西院に句碑を起した。その追悼には、文化四年三十三回忌に無射集があり、文政七年五十回忌に長月集一名後無射集がある。

チヨアン 樽庵 金澤に於ける俳人の庵號。麥水初めて之を唱へ、蝶花・洪陶・雪杖之を繼席した。京都に於いては岸田稻庵も亦麥水の後を受けて樽庵二代を稱した。

チヨアン バクスイホツクシユウ 樽庵麥水發句集 一冊。金澤の俳人雪袋の手記したもので、新嶺栗集・續明鳥集・北枝會・鶴の音都の花廻り・萬帯・類題發句集等の中から、麥水の句を拾うたものである。

チヨウアリツラ 長有連 長政連の子。左兵衛尉又は左衛門尉と稱した。

チヨウイ 澄意 白山本宮の長吏。澄羽の弟。初めの名は仙藏坊大進。長吏澄純の歿後を受け、法印に任せられ、寛文六年三月朔日七社惣長吏の繪旨を頂戴し、同年加賀藩から

永世長吏職料草高百石を賜はるることになり、享保二年退職、十年六月廿六日八十九歳で歿。澄意學に志深く、和歌を北村季吟に學び、又白山問答・白山雜事記を著した。

チヨウウチ 長氏 (一) 藩政以前—その初清和源氏から出で、季頼の時大和に住して長谷部氏を稱した。季頼の曾孫爲連に至り、館を三河長馬に構へて長馬新大夫といひ、爲連の子信連は遠江長邑に生まれた。信連は鎌倉時代の初能登の地頭に補せられ、その子孫長を苗字とし、室町時代に至つては守護品山氏を佐け、戰國の時上杉謙信の調略によつて品山氏の臣屬或は反旗を翻したが、介然孤忠を守り、主家の遂に滅亡するに及んで織田氏に歸した。その世代は信連・朝連・政連・有連・盛連・國連・正連(初宗連)・頼連・連賢・藤連・泰連・政連・光連・秀連・氏連・教連・英連(初綱連)・續連(初勝連)・綱連(初重連)・連龍(初好連)と相承けた。

(二) 藩政以降—長氏の連龍の時天正九年から前田利家の興力となり、次いで全く臣事するに至つた。その世代は連龍・好連・連頼・元連・尙連・高連・善連・連起・連愛・連弘・連恭・成連であるが、元連は家を襲がなかつた。秩祿は連龍の晩年に三萬三千石、連頼から三萬三千石(内二千石與力知)を恒例とした。

(三) 邸第—長氏連龍以來鹿島郡田鶴濱に本邸があつたが、金澤にも居館を設けてゐた。慶

長金澤城副には三ノ丸石川門内にその邸を記載し、信連記等には、慶長五年の役後城內西、丸に邸地を賜つたが、後連龍は家を好連に譲り、田鶴濱に隱居して時々金澤に出動したとある。十六年好連歿して連龍又家事を視、二子連頼を嗣子とし、十七年長町の邸地を受けた。次いで寛文十一年連頼歿し、尙連襲ぐに及び采邑を變へ、田鶴濱の館を閉ぢた。その長町の邸は、明治二年金澤藩廳の用に供せられたものである。

(四) 下屋敷—長氏の下屋敷は、上家中(今の穴水町)を主とし、北の家中(今の芳野町)・荒屋敷又は新家中(今の大隅町)に在つた。慶長十六年九月奥村河内守等が連署し、屋敷奉行淺野將監等に與へた奉書に、八町二段とあるが、後寛文十一年その領地鹿島半郡が召上げられて、家士の悉く金澤に搬宅するに及び、次第に地積を増したのである。

チヨウウチケイス 長氏系圖 一卷。加賀藩の老臣長氏の系圖で、清和天皇から明治の長克連までを次第してある。活字本では長氏文獻集の中に收められる。

チヨウウチツラ 長氏連 左衛門尉。秀連の子。氏連の時は恰も文明前後に互る。當時品山氏の臣温井氏等、黨を結び派を別つて能登の國內大に繁れ、郷民亦壓擧して領主に抗するものあつた。是を以て氏連は遂に穴水に自凡し、累世の居城一たび失はるゝに至つたが、叔父教連後に奮起して旗幟を翻し、遂に之を恢復することを得た。

チヨウウチノカシン 長氏の家臣 加賀藩の老臣長氏は長谷部信連以來の舊家であるから、家臣の待遇等他に異なるものがあつた。

その内此木長氏は長谷部信連の二男景信が嗣至郡大屋庄此木の地頭となつたに起り、上野長氏は三男行連が大屋庄上野の地頭となつたに起り、宇留地長氏は四男四郎某が大屋庄宇留地の地頭となつたに起り、阿岸長氏は五男五郎某が櫛比庄阿岸の地頭となつたに起り、山田長氏は六男六郎某が大屋庄山田の地頭となつたに起つて、何れも宗家長氏の家臣中家子と稱する階級に屬し、世々家老を勤めたが、その中宇留地氏と阿岸氏とは寛文八年の浦野事件によつて滅亡し、他の三家は明治まで繼續して悉く長氏に復した。又關・中村・加藤・田屋・村井・小林・合田・田邊・浦野・瀬見十家を郎等の家とし、吉田・大田・山本・岩田・栗津・櫻井・小川を中郎の家とした。以上皆信連以來の舊家で、家子郎等・中郎から分岐したものは譜代家といふた。又宇野など十餘家の屋形衆があり、もと品山氏の昵近であつたのが、主家没落後歸服したもので、一に別當と呼び、年頭等に別に賜金があつた。此くの如く家士の序列は祿高の多寡によらず、家格を以て上下を定めたものである。又能登舊領内小俣の和泉・池田の榮方・酒井の一樂の如き百姓も、古へ長家に對し拔群の功があつたから、年始等に調を賜はり酒肴を與へられる例であつた。

チヨウウンジ 超雲寺 金澤長土屏三番丁に在つて、眞宗東派に屬する。初め能美郡清水に居たが、寛永七年金澤末寺の看坊となつて寺内に移り、後所々を経て明治四十二年今の地に轉じた。

チヨウウエイ 澄榮 白山本宮の長吏。文明六年富樫政親が弟幸千代と國を争うた時に